

別寒辺牛川水系におけるイトウの産卵床分布及びその決定要因

北海道大学大学院環境科学院 野本和宏

はじめに

イトウはアキアジ(シロザケ)やカラフトマスなどと同じサケ科に属している、日本で最も大きく成長する淡水魚です。かつて、十勝川では2m10cmという超大物が獲れたという記録もあります。また、アイヌの人々には「チライ」や「オビラメ」などと呼ばれ、「巨大なイトウが川を渡っている鹿を丸呑みにした」というアイヌの伝説があるくらいです。しかし、河川改修や流域の過剰な森林伐採、大規模な牧草地化などによる生息環境の悪化、ダムなどの建設による河川の分断が北海道のイトウを激減させてしまい、今では「幻の魚」という名が定着しつつあるように思います。そんなイトウですが、1970年代くらいまでは根釧原野のほとんどの川に生息していたとされています。しかし、その後の大規模な牧草地開発と時期を同じくして、多くの河川からイトウが次々と姿を消してしまいました。そんな根釧原野において、厚岸町を流れる別寒辺牛川はイトウが現在もなお、安定的に生息しており、いわば道東の「最後の聖域」といえます。私たちはそんな別寒辺牛川のイトウが今後も繁栄し続けることを願って、まず、「別寒辺牛川のイトウがどういう状況にあるのか？ 現在、どれくらいの個体数が生息し、繁殖しているのか？ また、どこ、どういう場所で産卵しているのか？」といった基本的な情報や現状の正確な把握を目的として、調査を始めました。

その結果を元に別寒辺牛川の流域にお住まいの皆様には厚岸のイトウを次世代に繋いでいく方法の提言をしたいと思います。

方法と結果と考察

イトウは川底の砂利を掘って産卵床というものを造って、その中に卵を産みますが、1尾のメスが造る産卵床の数が分かっているため、産卵期(春)に川に沿って歩いて、産卵床の数を数えることによって、産卵したメスの個体数までも推定するという方法を使って調査をしました。

別寒辺牛川水系のイトウは豊富な河畔林に覆われた矢白別演習場の中の支流で多く産卵していることが分かりました。地元の方のお話によると、1980年頃までは演習場外の支流でも産卵していたようなのですが、現在はその多くが絶滅してしまっていることが分かりました。イトウが産卵している川の特徴は「豊富な河畔林に覆われていて、流域から泥が流れ込んでいない。」「流路が原始のままの状態では激しく蛇行しながら流れ、川底には産卵床になる粒径17~64mmの小石が豊富に敷き詰められている。」などです。また、別寒辺牛川で1年間に産卵するメスの個体数は年によって変動があるものの、約40尾から60尾と推定しました。イトウは1回産卵したら、死んでしまうサケとは異なり、産卵した後も生き残って、20年近い生涯で繰り返し、産卵を行います。また、自然条件下のイトウのメスは毎年、産卵する個体はまれであり、1年、または2年おきに産卵するとも言われていることから、実際に別寒辺牛川に生息しているイトウのメス個体数はその2倍ほどとも考えられます。この数字を多いと考えるか少ないと考えるかは人それぞれだと思いますが、近年、別寒辺牛川ではイトウ釣りをする人の人口が増えてきて、個体群に与える影響が心配されます。上記のような現状を踏まえて、釣りをされる方にはまず、釣った魚を持ち帰らないでその場に直ちにリリース(放す)することをお願いしたいと思います。また、イトウの産卵期である4月~5月上旬は産卵場所となる上流域でのイトウ釣りを自粛していただくようお願いいたします。